

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390102236		
法人名	一般社団法人 未来会		
事業所名	グループホームはぎの里		
所在地	熊本市北区植木町鞍掛1782番地		
自己評価作成日	令和3年11月30日	評価結果市町村受理日	令和4年1月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年12月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成30年4月に開所し4年目を迎えたグループホームはぎの里は、植木市街の竹林に囲まれた静かな環境に立地する居心地の良い木造の家です。
心地よく安心して暮らしができる、親しみやすさのある、「寄り添いを追及する」を目指した、家庭のように暖かいグループホームです。
特に食事には力を入れて取り組んでおります。
米は「七城米」 鮮魚は「田崎市場直送、「肉問屋直送」の肉、「自家菜園」の野菜で、「食べる喜び」「食べる楽しみ」「快適な暮らし」ができる支援を継続している「はぎの里」です。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して4年入居者の入れ替りも少なく、101歳を筆頭に和やかな日常生活に、職員の「寄り添い」や「聴く」力を発揮し、自然体でのケアに入居者は和やかに生き生きと生活されている。「元気の源は食から」としての食支援や、コロナ禍に制約もある中で環境の変化を求めた外出も特徴である。開設当初から地域に密着した運営は、地域からの声かけや差し入れ等に表われ、高齢化する住民の見守り体制等地域の話し合いに関わり、運営推進会議も委員で日程を決められる等地域力もホームへの後押しとして生かされている。烏骨鶏の鳴き声やピアノを奏でる音、職員の明るさとともに竹林からの風が清々しいホームであるとともに、住民が歩いて訪問できる環境であり、災害時の避難場所としての提供や認知症ケア推進への寄与に大いに期待したいホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に法人の理念を掲示して「自分の親がしてもらいたい介護」を理解し職員一同が理念の共有を図っている。	開設して3年、寄り添いを追求することを目指し、退屈させない日々や入居者との関わりを大切に、家”でる事を心したケアに取り組んでいる。職員が一つになりケアについて話し合う機会を作り、業務中心にならず「寄り添う」ケアの実践し、理念が息づいていることが表われている。地域密着型サービスとしてもこの地に確固たり基盤が築かれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎日の朝夕の散歩時、近隣の方々の声掛けをいただいたり、庭先の花のおすそ分けをいただいたり、温かな地域の見守りの中で過ごす事が出来ている	田原坂ウォークラリーに参加したり、町の文化協会主催の発表会に入居者も見学に出かける等地域に一員として入居者共々活動している。また、昔ながらの関係が今でも色濃く残る地域であり、野菜の差し入れや散歩時の歓談、ホームに気軽に立ち寄られる住民の姿も見られるホームである。自治会会議への参加や地域福祉推進員として高齢化率の高い地域である事も踏まえ地域の見守り体制についての話し合いを進めている現状に有り、地域の中にある事業所として高い意識を持って関わっている。	コロナ感染症が落ち着けば地域交流室を活用したいとの意欲も聴かれた。感染対策は徹底されており、活用方法を地域と検討頂きたい。地域の縁側活動などに大いに期待されるホームである。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日常的に地域の中を散策散歩で外に出るので地域の理解も得られている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に1回運営推進会議を開催し、日常の利用者様の様子や、グループホームの取り組み、活動の報告をおこなっている。参加者の意見を活用し、ケアの向上に取り組んでいる	このホームの運営推進会議の特徴はメンバーにより日程を決定されることに有り、案内を出さずとも参加されるという意識の高い地域である。コミセンを会場として、議題を提示しながらの意見交換は委員からの専門的な指導やホームへのアドバイスなども出され、ケアサービスに反映させている。また、議事録はホームページでの開示としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市担当者の出席はないが、包括支援センターの職員に出席頂き、地域の情報を得ることができている。市への問い合わせが必要な時は、事前に書類提出を行い助言をいただいている	運営推進会議への地域包括支援センターからの参加時に情報を発信や相談する等協力関係を築き、包括支援センターの職場体験者も運営推進会議に参加される等ホーム側も協力している。行政には必要時には事前に書類を提出する等必要最低限での関わりではある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内研修を行い、虐待の具体的事例を取り上げ職員の周知を図っている。その中で利用者様の行動の制限を行わないケアで、寄り添うケアを行っている。	身体拘束はしないことを前提として、管理者や主任を中心とした身体拘束適正化委員会を開催し、勉強会の中で全職員へ周知徹底している。ネットからの事例を基にした勉強会を開催し、玄関等開錠し自由な環境と、「寄り添う」ことを旨とした関わりが入居者の落ち着いた生活として生かされている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の方の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定例会で月1回は研修を実施している。日常のケアの中で又入浴時の身体状態観察を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者様の中に制度を利用されている方がいる。制度について学び、利用者様の視点に立った支援を行っていく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際十分な説明を行い、家族の質問にも丁寧に答え、家族の納得を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族からの意見や質問があった場合、改善が必要な時は直ぐに話し合いを実施している。又利用者様の行動言動を観察し記録として残し申し送り共有を図っている。	毎月の利用料を持参払いとしており、家族の訪問時に入居者の顔を見て安心してもらいたいとしている。コロナ禍には窓越し面会とし、月ごとの報告書や写真を配布し、入居者の声を家族に代弁している。また、家族からの感謝の言葉を職員のモチベーションとして生かし、意見等が出された場合には話し合う体制である。入居者には傾聴しながら要望等を引き出し、食事や外出等に反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の提案意見は職員会議時に聞き取り、反映している。 管理者は職員個別から話を聞くようにしている	朝からの申し送りによる情報の共有化や毎月勉強会や業務体制の話し合い、関わりをテーマにした意見交換等が行われている。職員同士の人間関係も重要であると認識し、現場のリーダー及び主任を中心に働きがいのある職場環境に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の努力を重視し、適切な評価を行い、やりがいのある職場環境を作り上げている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	働きがいのある職場づくりとして、資格取得や研修会参加には積極的な取り組みを行い、職員が向上心を持って働けるように支援を行っている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	熊本県地域密着型サービス連絡会「熊本北ブロック」に参加して他事業所との情報交換交流を行っている		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の言葉にしっかりと耳を傾け、本人の性格や思いを把握し、自然な形で共同生活に入り込めるような支援を行っている		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との面談には十分な時間を作り、家族としての思いをしっかりと傾聴を行い、問題解決につなげている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者様の言葉をしっかりと聞き取り、本人が今何を必要としているのかを見極め、その時の状況に合わせた、医療 介護の意見を取り入れながら適切な対応を行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	暮らしの中で、個々の能力に合わせて、生活の流れに沿った動きを職員と共に行い、生活にメリハリをつけて過ごしていただいている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族来所時には、近況報告を行い、日々の様子をスナップ写真で提供して、日々の生活を見ていただく。又家族の協力を仰いで問題解決を行って行く事もある		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今迄の生活歴をしっかりと踏まえうえで、本人が望む馴染みの関係を継続するために、家族の協力のもと支援を行っている	入居時に入居者のバックボーンを把握している。家族の訪問の他、古くからの友達や親戚の方々の訪問等もある。入居者にとっての馴染みの場所としてお盆参りを職員が支援し、正月気分におせちやおとそ、干し柿作りや畑での作業など慣習を支援している。	職員は入居者と1対1となる入浴時に本音が聞けるとして会話に努められている。今後も入居者の声を拾いながらケアに反映されることを期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	共同生活を一緒に送れるように、互いに声掛けあい、出来る事と出来ない事をみんなて補いながら助け合える環境づくりを行っている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後でも、ご家族からの相談には可能な限り支援を行っている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人が思いを口に出して話せるような環境を作る為、1対1の散歩や入浴を貴重な会話の時間として大切にしている。その情報は職員間で共有して把握に努め、本人の意向に沿えるよう努めている	職員は入浴時や散歩等1対1になる場で入居者との会話や、聴くことに徹し、意向等を推察している。また、入居者の行動を見逃さず、時には入居者の声を家族に代弁したり、本人の言葉を想像(推察)し、プランに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に、面談や自宅訪問を行い、本人・家族から今迄の暮らしぶり、環境の把握を行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	年を重ねるごとに日々の暮らしが変化してきている。今までできていた手仕事や楽しく参加していた活動が出来なくなる等の現状の把握に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	心身状況の観察を行い、月2回の職員会議で、意見交換を行い、その時々状況に応じたプラン作成を行っている。変化があった場合は直ぐに対応を行っている。	定例職員会議により職員の気づきや観察の結果を話し合うとともに、本人の言葉である「楽しく暮らしたい」の実現に向け、ライフサポートプランを作成している。3ヶ月位ではモニタリングを行い、状況に応じてプランを見直し再作成している。今の場所で過したいとする思いに応え、家族・主治医・看護職員や管理者とのカンファレンス等を行い、プラン化する等現状に即したプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録の中に、支援内容 取り組み 気づき 本人の言葉を入力し、全員で確認 共有して、介護計画の見直しに活かしている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人家族も入居当時から4年となる方もおられる 一人一人にあったサービスの見直しを柔軟に行いながら、その時の意向に沿ったサービスの提供を行っている		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在地域の行事がコロナ禍で中止となり、交流の場が少なくなっているが、毎日の日課である地域の中の散歩で声掛けや挨拶を頂き、顔なじみの関係ができてきている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人家族が希望するそれぞれのかかりつけ医との関係を大切にしています。状態の報告を行い、指示を受けて、適切な医療を受けられるように、主治医との関係づくりを行っている	入居を機にかかりつけ医を移行される場合もあるが、入居者や家族の意向に沿いこれまでの医療機関を引き続き支援する体制としている。受診には職員が付き添う他、家族の協力も得られ情報を共有している。職員は夜間帯であっても心配な点があれば主治医の指示を仰ぎ、自己判断をせず必要に応じて、緊急搬送の指示や往診等主治医との良好な関係を築いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の健康管理には看護 介護共に連携を図り、医療的な問題は看護師に相談を行い助言や指示を受けている。情報の共有を図り、相互の理解のもとケアに当たっている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の連携室を通して情報交換を積極的に行い入院中の状態把握を行い、早期退院にも直ぐ対応できるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に説明を行い、家族より了承は得ている。 重篤な状況になった場合は家族の意向を再確認し、かかりつけ医 家族と連携を図りできる限りの対応を行う。	入居時に看取り指針に基づき説明している。入居者の状態を見ながら必要と思われる時点で家族と話し合い、意向を確認している。医療中心となるとホームでの対応は難しいが、日々生活を共にしながら自然な形で最終章に対応するとしている。看取りケアについては勉強会で急変時の対応等を含め、職員のメンタルケア等を看取り師を招き勉強会を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会で急変時の対応や処置について説明を行っている。 又日頃のケアの中で初期対応の説明を行っている。夜間時の対応は連絡先を目につくところに貼って、応援体制を整えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎年2回消防 消防団 運営推進委員の協力のもと夜間想定消防訓練を実施していたが、コロナ過で、訓練を延期している。 災害の備えて、発電機や米 水の確保を行っている	例年であれば、地元消防団や運営推進会議メンバーとともに消防訓練が行われていたが、今年度は消火器の位置確認や夜勤帯の対応等を話し合っている。日頃の安全管理や地域との協力体制が重要であると認識し、熊本地震の教訓として水・米・塩等を常備し、有事の際には地域への協力を依頼するとしている。	自然災害時の避難場所として地元小・中学校を想定しているが、入居者には避難が困難で有り、地域の人々が歩いてくれる当ホームを避難場所として提供したいとしている。地域への貢献の一環でもあり、運営推進会議や自治会等への啓発や情報発信に大いに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の性格を周知し、しっかりと視線を合わせた傾聴を心がけ、最後まで聞く姿勢を心がけている。	職員は入居者一人ひとりとゆっくりかかわり、個別支援の時間を大切にしている。排泄時は横からそっと声をかけ、入浴時の同姓介助等誇りやプライバシーに配慮した対応を心掛けている。また、長年の関係性が馴れ合いにならないように心して取り組み、「聴く」に答えを見いだしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	一緒に活動を行う中で、本人の発する言葉 表情 動きをしっかりと見極める。その中から本人の思いを気づき自己決定できるように支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の体調や気分に合わせて、個々に合わせた対応を行い、利用者様優先で支援を行っている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の思う拘りを大事にして、髪型 髪染め 馴染みの美容室へ同行支援を行っている。衣類も朝から自分でクローゼットから選んで着用されている方もいる。衣類の選択ができない方には、バランスの良い着こなしの提案をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と一緒にテーブルを囲み、季節感のある手料理を美味しく食べています。メニューも豊富で利用者の方々の嗜好を取り入れた調理行っています。	ホームの特徴として「元気のもと食から」と食にこだわりを持って支援している。自家菜園での収穫を喜び、洗い物など下処理に関わりながら全員揃って食事を摂っている。職員は普段の会話に食べたいもの等を盛り込み献立に反映させており、残食のない賑やかな食事である。また、入居者の経験(漬物付け等)や畑での収穫、野菜洗い、食卓に上る喜び等一連を通して出番を作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士が立てた献立に沿った食事の提供を行い、肉魚がバランスよく使われています。水分摂取は1日を通して、生活の区切り区切りで、種類を変えながらこまめに支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後毎回本人が洗面台で済ませているが、磨き残しがある為、最後の仕上げは介助を行っている。特に就寝前は義歯の洗浄や取り外しの支援を行っている。口腔内の痛みがあった場合は直ぐに歯科受診を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用して、排泄の頻度や排便のコントロールを行い、個々に応じた排泄支援を行っている。	排泄チェック表を活用し、個別の声掛けや誘導を行う等全員がトイレでの排泄を基本としている。排泄用品は布パンツやリハビリパンツに尿取りパットを併用し、個々に応じ昼・夜の排泄用品を使い分けている。ポータブルトイレの使用も無く、職員が誘導や見守りを徹底している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維を多くとれる食材や乳製品等の提供、個々に応じた便秘の予防に取り組んでいる。 かかりつけ医との連携のもと、緩下剤の服用で調整を行っている		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週に3回と入浴日は決めているが、本人の体調や気が乗らないときには、無理強いないで変更を行い、柔軟な対応を行っている。	毎日入浴の準備をし、基本的には週3回としているが、入浴拒否時には無理強いせず、「入ってみようか」と言われた時に時間を問わず入浴を支援している。入居者の中には、自分で衣類を選び入浴を待たれる姿も見られる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は本人の状況に合わせて、臥床時間を設けたり、夜間は本人のペースで就寝して頂いている又室温管理や布団干し、洗濯をこまめに行い、気持ちの良い環境で入床できるように支援を行っている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の管理は看護師が行い、服薬に関する注意点等は内容変更時に都度情報を共有している。 又個別の薬剤情報は一覧できるようにファイルしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今迄の生活歴 仕事内容 等々の情報を収集して、興味を持てる活動を継続できるように支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日はほとんど毎日、外に出て体調に合わせた距離を散歩している。又季節を目で肌で感じられるように、その日の天気に合わせて、戸外のドライブに出かけている。	入居者は庭先に出て体を動かし、歩き馴れた近隣の散策等その日の気分・天候により外に出ている。コロナ禍のなかでも、状況を見ながら地域の公園までの散歩やみかん山やコスモスの見学など車窓から楽しみ、夏場には熱中症対策を徹底し朝・夕散歩に出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が十分にできない利用者様が多いので所持しないようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から電話をかけてほしいとの要求はないが、誕生日に子供様からお祝いの電話があり、本人に電話口に出てもらい、楽しい一時を過ごしていただいた事もある		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	要所に手すりが設置しており、一人で目的の場所まで歩いて行く事が出来る。又ゆったりとしたホールはお食事だけではなく、レクレーションやくつろぎの場としてご利用いただいている。採光を取り入れた明るい空間作りを行っている。	コロナ禍によりリビングのテーブル配置を入居者全員がテレビを視聴できるようにコの字型、及び対面しないように変更している。地域交流室をオープンにするとワンフロアの広々とした空間となり、一人になれる場所を確保している。ホームで飼う鳥骨鶏の鳴き声やピアノを奏でる音、朝からのレクとしての熊本弁教室、竹林からの清々しい風等入居者にとって何者にも代えられない環境である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ベランダ側にソファやテーブルを設置し、気の合う方とのおしゃべりや一人で読書を楽しむ事のできる場所を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が使い慣れた帽子やお気に入りの雑誌を、いつも目に触れる場所に置いて、安心して過ごせるように支援を行っている。	家の延長線上にあるとして捉え、今まで使っていた物の持ち込みを依頼している。家族写真や絵など馴染みの物が持ち込まれ、好きなようにレイアウトしても良いとしているが、身体状況により歩行に応じトイレの距離や見守りが出来るような配置としている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホールには目につきやすい場所に大型のカレンダーや時計を設置し、日時が各自確認できるようにしている。又トイレや手洗いと1日の使用頻度が高い水回りは安全な動線を確保している。		